

## 『わたしと聖体』

ヨゼフ 加納 英雄

結婚して三十四年、受洗して十五年になります。未洗者のまま十一年位、毎週妻と二人の子供達と教会にでかけミサに授かりました。ある日「パパはどうして聖体拝領しないの？」と聞かれました。この時には家に仏壇が在り、父が眠っていて跡取りのわたしは、仏教とキリスト教のはざままで洗礼を躊躇っている時期でした。家族全員が信者にと決心し洗礼を受け、洗礼を受けてからは、教会共同体の一員として教会行事、教区行事に積極的にかかわり、共同体家族から沢山のお恵みを授かりました。

そんな時、日本カトリック研修センターで行われた「家庭委員会」の講話の中で、故相馬司教様は『私の家にも神棚も仏壇もありませう。日本人のルーツを辿れば、皆神徒か仏教徒ですヨ。ですからご先祖を敬う事は、主を敬う事ですヨ』と聞いた時、わたしにはまさに「神のみことば」に出会った感

じがしました。我が家のご先祖を護り、キリスト者として生きる確信が出来ました。

この城北橋教会の前を通り、受洗した小さな教会でミサに授かっていましたが、聖堂は聖なる所としての尊厳が保たれてはいない様な感じで、ミサ後は司祭との対話も、信徒の交わりも次第に無くなり、そして一家族、また一人と教会を変えられる内、在籍のまま他の教会へミサを授かりに行かれる多くの家族、「開かれた温かい教会」のエンリッチ性が失われ、教会に行くのが苦痛に感じる事もありました。

親しみを感じ、心を許し、信頼を置き、尊敬の念を懐ける司祭。「対話と交わり」を通し、多くの共同体家族が支え合い、分かち合える『主のみこころ』に適った教会、在りました!!! なんと素通りしていた、城北橋教会でした。何の躊躇いも無く、再びキリストの出会いを祈り移籍しました。

ミサに授かる事で「神のみことば」と「聖体」を「一致」と「生

きるよろこび」の力と糧で、荒廃した我が心にキリストと向かい合う大きなお恵みを頂きました。この教会で授かる「典礼・対話・交わり・連帯」等総てが御聖体で、「開かれた使徒的夫婦」として、主に召されるまで「生きたささげもの」として、主の基に集う家族の一員としての、信仰生活が出来ます様にと、祈る毎日です。



## 『ミサと聖体拝領』

マリア・カタリナ 江口 信子

聖体を受けると言う事は、キリスト御自身を頂く事です。特に心が渴いている時、何か特別な良い事をした時、疲れ果て、無気力な時、酷く傷ついてしまった時、その様な時、ミサ中に、私は、神様の愛がとても強く感じられる事が有ります。そして、パンの形のキリストを頂いて帰ります。マザーテレサが教えて下さった様に、深い尊敬と愛をもって、キリストをお迎えする事ができる時、私の様な者でも、神様の道具になれると信じています。